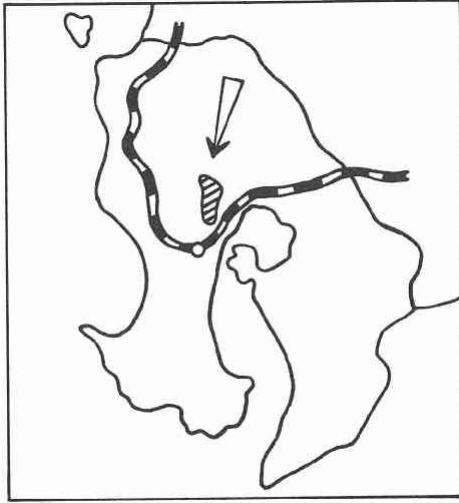


第一編 自然の姿



県内における吉田町の位置図

第一章 位置・面積

第二節 位置

吉田町は、鹿児島県のほぼ中央部に位置し、鹿児島元標より北一六・一キロの地点にあつて、鹿児島郡に属している。南は鹿児島市に、西は日置郡山町に、北は始良郡蒲生町に、東は始良郡始良町に接し、海岸線をもたない内陸部の町である。

第二節 面積

県都鹿児島市の中心部から南国バス利用で約四十分の距離にあり、吉田町役場は町のほぼ中央部に位置し、本城一九六番地である。

各地域の標高 (単位.m)

吉田小	20.9
本城小	130.0
本名小	150.0
吉田南中	220.0
宮小	190.0
牟礼岡小	300.0

※上記は各学校付近の大体の標高である。

吉田町の緯度・経度

方向	東 経	北 緯
	度 分 秒	度 分 秒
極 東	130・36・0	
極 西	130・30・0	
極 南		31・39・0
極 北		31・45・0
役 場	130・33・40	31・42・30

総 面積

五四・七九平方
キロメートル

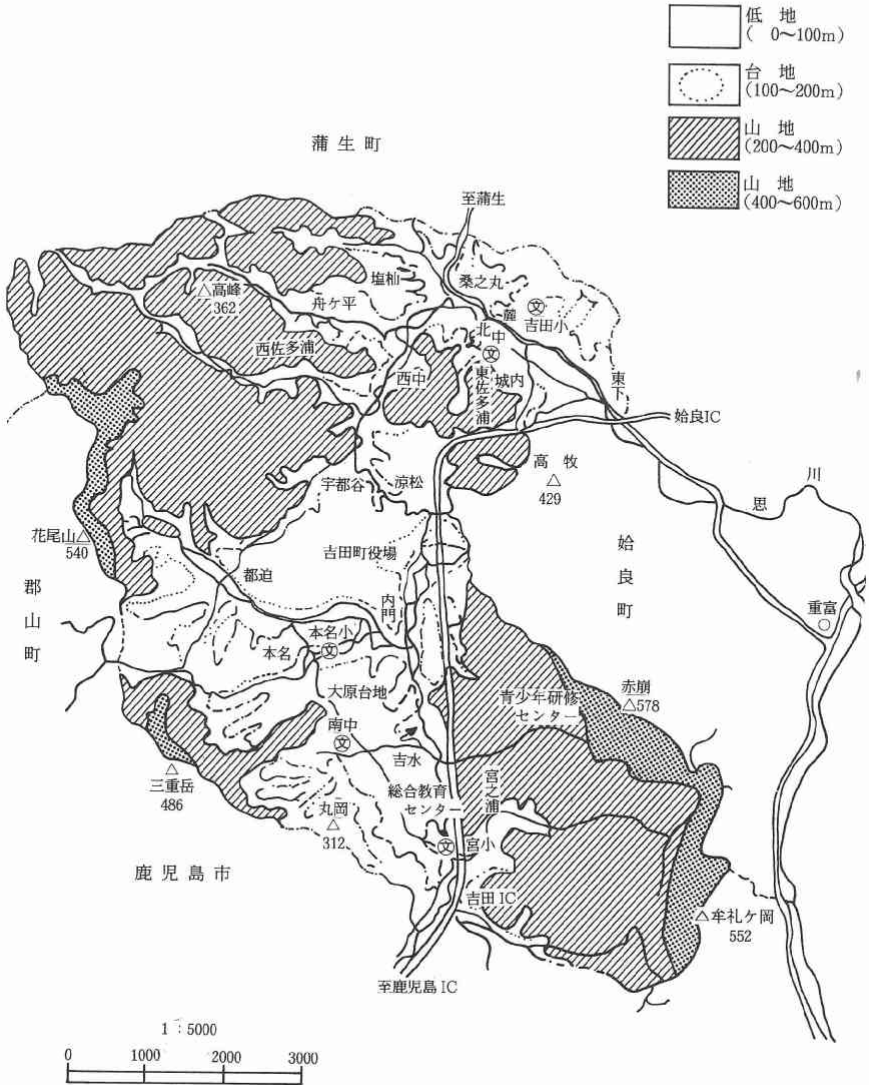
東西の長さ

四・九五キロメートル

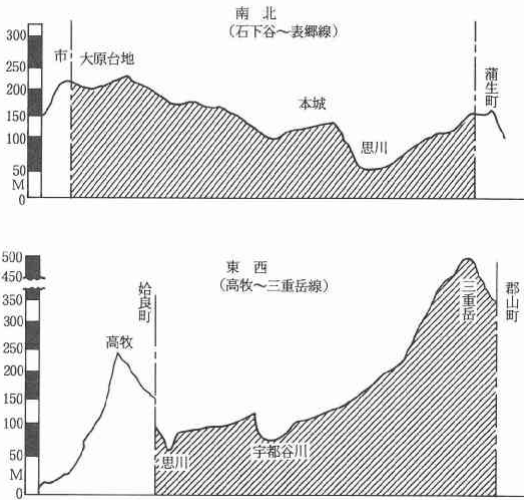
南北の長さ

八・七二キロメートル

吉田町地形区分図



地形断面図 (吉田町総合振興計画)



第二章 地勢・地質

第一節 地勢

吉田町は、南北の方向に長く長方形に近い形をしており、東は赤崩（五七九メートル）を盟主とする赤崩火山峰（西には花尾山（五四〇・四メートル）および雄岳（四三八メートル）を

盟主とした諸連峰がそびえ、これらの諸峰を源として、思川や思川水系本名川（女山川）、精木川（稻荷川）などの河川が山間を縫うようにして流れ鹿兒島湾に注いでいる。

本町の自然環境を概観すると、平坦地二七%、山間および傾斜地が約七三%を占め、そのため地形的な制約を受ける面が多い。

一、北部の地形

北部の東佐多浦、西佐多浦地域は、低地（海拔約一五メートルの沖積平野）と、あまり広くない台地が交錯しており、沖積平野の幅は〇・五キロメートルから二キロメートルぐらいである。この中心を思川が西から東へ流れており、始良町側に向かって開けた、町内では最も広い水田地帯を形成している。

二、南部の地形

本城・本名・宮之浦地域は、吉田町の中南部に属し、四方を山に囲まれ、その谷あいに発達した集落が多い。町内の南部と北部は、この山によって分断されたような地形であり、南北の交流に支障が多かったようである。

東は赤崩（五七九メートル）から牟礼ヶ岡（五五二・三メートル）に至る連峰、西は花尾山（五四〇・四メートル）・三重嶽（四

八六・四^ノ・丸岡(三二二・五^ノ)の諸峰がそびえ、これらの諸峰の間を埋めるように大原台地(シラス台地)が形成され、畑地帯になっている。しかし、近年は宅地造成が次々に行われ、地形的な変化を生じつつある。また、前記諸峰を源にして、本名川(本城川)、精木川の上流の倉谷川・牟礼谷川などの溪流が山間を縫って流れ、その流域には小規模な盆地が開け、水田として利用されている。

本名から本城へ流れる思川水系の本名川(本城川)は花尾神社から約一〇〇^ノ以下流付近で、落差二〇^ノぐらいの滝(六間滝)をなしていたが、その落差を利用して高附発電所ができています。

その下流は女山川となり、本町と始良町の境に沿って流れ下り、東佐多浦で北部を流れる思川の本流に合流し、やがて錦江湾に注いでいる。

倉谷川、牟礼谷川は流れ下って精木川となり、その下流は稲荷川となって、やがて錦江湾に注いでいる。

第二節 地質

吉田町は、標高五四〇^ノの花尾山・四三八^ノの雄岳・四八六^ノの三重岳等の山稜が北西部から南西部にかけて、また、標高五五二^ノの牟礼ヶ岡・五七九^ノの赤崩を中心

とした山稜が北東部から南東部にかけて分布し、それぞれ急峻な地形を構成している。これらの山稜に囲まれた地域には台地が広がっている。南部の台地は、牟礼ヶ岡を水源地とする精木川に、中央部の台地は花尾山、三重岳を水源地とする本名川に、北部の台地は雄岳を水源地とする思川によって侵食されている。

本地域は鮮新世から完新世にいたる堆積物および火山岩類が分布している。北西部は、緑色の凝灰角レキ岩を

三重岳からの眺望



含む永野層下部層が宇都谷^{もろき}都迫間と溝口^{もろき}諸木間に分布している。この層は本地域の最下位を形成しており、淡水性の珪藻化石を産出する凝灰質砂岩・シルト岩よりなる。

同じく凝灰質砂岩・シルト岩よりなる永野層下部層が三重岳・花尾山

表1 吉田町総合地質柱状図

(大塚・西井上 1980 に加筆)

時代	地層名		柱状	層厚	岩相		
第四紀	更新世	沖積層			5	粘土・砂・レキ・火山灰	
		後期	始良火砕流堆積物	入戸火砕流堆積物		80m	軽石凝灰角レキ岩
	妻屋火砕流堆積物				15m	細粒の軽石凝灰角レキ岩	
	大隅降下軽石堆積物				0.5m	軽石, 火山灰	
	旧期ローム層				0.3m	黒色, 火山灰層	
	阿多(蒲生)火砕流堆積物			10m	黒色溶結凝灰岩		
	中期		五反田層			12m	レキ層・凝灰質砂層・シルト
		加久藤火砕流堆積物			52m	溶結凝灰岩	
		吉田貝層			10m	円レキ, 貝殻砂	
	前期	隼人層			60m	砂・凝灰質シルト・白色火山灰層	
			国分層群	小田火砕流堆積物		10m	軽石凝灰角レキ岩
		湯湾岳安山岩				角閃石含有両輝石安山岩	
		蒲生層			40m	砂・凝灰質シルト・凝灰岩	
		鍋倉火砕流堆積物			8m	軽石凝灰角レキ岩	
		紀世	前期	先加治木安山岩類			1. 角閃石含有両輝石安山岩 2. 両輝石含有角閃安山岩
1. 牟礼岡安山岩							
2. 麓安山岩							
花尾流紋岩類				1. 2. 3. 4. 5. 黒雲母斜長石流紋岩			
1. 丸岡流紋岩 2. 花尾流紋岩 3. 雄岳流紋岩 4. 元峰流紋岩 5. 高峰流紋岩			 				
新第三紀	鮮新世	上部			70m 凝灰質砂層・同砂シルト・シルト層		
		花尾安山岩類 1. 三重岳安山岩 2. 飯山安山岩 3. 花尾安山岩 4. 前峰安山岩			1. 角閃石含有両輝石安山岩 2. } 3. } 両輝石安山岩 4. }		
新第三紀	世	永野層	下部		200m 砂シルト互層・砂層・シルト層 緑灰色を呈する凝灰質砂岩・同シルト岩		

周辺部に広く分布する。この層の堆積時に、花尾山、三重岳を形成している花尾安山岩類が貫入・噴出してきている。この安山岩類を不整合に覆って永野層上部層が堆積している。この層の堆積時に北部の雄岳、高峰、西部の花尾山、南部の丸岡などを形成している花尾流紋岩類が貫入・噴出してきている。また、本地域の東部では永野層下部層を不整合に赤崩・牟礼ヶ岡を形成する先加治本安山岩類が覆っている。

本地域北東部には、更新世前期の国分層群が広く分布している。国分層群は加治木層・鍋倉火砕流堆積物・蒲生層・小田火砕流堆積物・隼人層よりなる汽水から淡水の内湾性の堆積物である。本層群には大型植物、貝類、有孔虫類、小型魚類などの化石を含む。片子山や觸田下付近では、蒲生層堆積時に局地的に貫入・噴出した湯湾岳安山岩が分布している。今から二十万年より古い更新世中ごろホオジロザメなどが住む暖かい海の時代に吉田貝層が堆積した。現在局地的に分布する本層からは、有孔虫類、海棲の貝類・大型魚類・サンゴ・大型脊椎動物などの化石を多産する。

これらの層を県北の加久藤カルデラの噴出物である加久藤火砕流堆積物が覆っている。この火砕流堆積物は溶結して溶結凝灰岩となっている。十数万年前、寒流の流れる寒い時代、本地域北東部に分布する五反田層が堆積した。本層は淘汰の悪い角レキや円レキを多く含むデルタ（三角洲）堆積物である。次

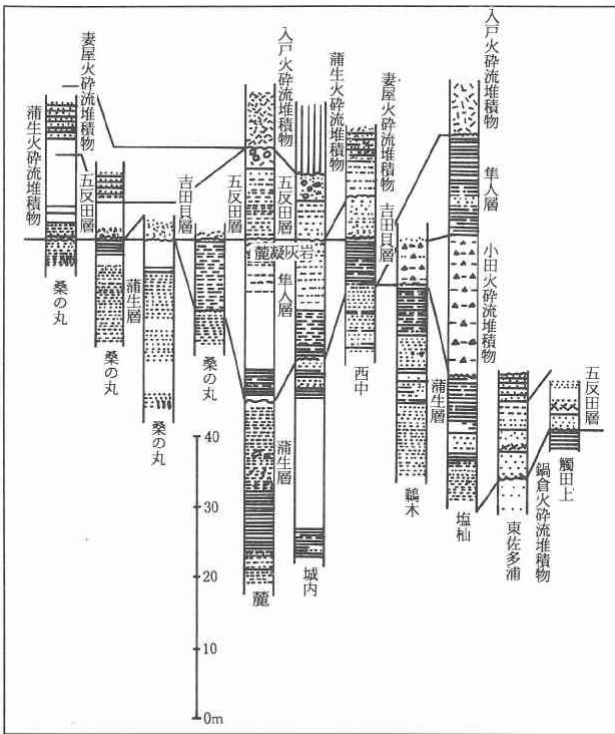


図2 吉田町北部の地質柱状図（大塚、西井上1980）

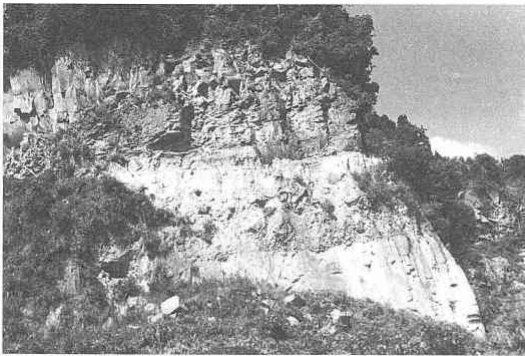
に、南の指宿地方にある阿多カルデラの噴出物が不整合に覆っている。本層は蒲生火砕流堆積物と呼ばれている黒っぽい溶結凝灰岩である。これらを不整合に覆って始良カルデラ噴出物の大隅降下軽石層、妻屋火砕流堆積物、入戸火砕流堆積物までの一連の堆積物が本地域の大半を覆っている。二万二千年前に噴出したこれらの火砕流堆積物は本地域の南部を中心に厚く堆積し、未溶結で一般にシラスと呼ばれている。このシラス台地を覆って桜島火山創生期の火山灰（サツマ）が広く分布している。以上が吉田町を構成する地層や岩石と土地の生い立ちのあらましである。（巻末吉田町地質図参照）

一、北部地区

(一) 五反田、城内、麓付近

思川をはさんで兩岸の地質は似かよっている。国分層群の地層や岩石が基盤岩となっており、その上位に五反田層、蒲生火砕流堆積物、妻屋、入戸火砕流堆積物と続く。城内には、クレンザー工場跡に大露頭がある。この露頭は、国分層群の隼人層が基盤にある。クレンザーに加工していたのは、隼人層の上部の麓凝灰岩である。この地層は顕微鏡で観察すると均質な火山ガラスからできていて、無層理で一般にクレンザー層と呼ばれている。

露頭の中ほどに白色のクレンザー層を不整合に覆って大きな角レキ、拳頭大の円レキ、砂層が見られる。これらは五反田層と呼ばれるもので、中でも円レキの分布はひろく対岸の麓付近にも分布している。五反田層の上位には柱状節理が発達していて、黒っぽい蒲生火砕流堆積物がある。本層は軽石の少ない溶結凝灰岩で、軽く、石材としても加工されていた。



城内の大露頭

吉田小学校裏の成層した地層は、国分層群の中の蒲生層である。約二五

メートルの層厚があり、岩相上三つの部分にわけられる。下部は凝灰質粗粒砂層および軽石層からなり中にシルトレキを含む。中部は砂・シルト互層が発達し、この中からはブナ、ツクバネカシ、カエデなどの植物化石を多産する。上部は

凝灰質粗粒砂層になっている。道の奥にはクレンザー工場がある。これは、小田火砕流堆積物の上位にある単人層の麓凝灰岩をクレンザーに稼行しているところである。このクレンザー層は城内の大露頭のものと同じで、城内、麓付近の鍵層となっている。本層の上位には五反田層、妻屋・入戸火砕流堆積物と続く。

(二) 桑之丸、西中、鶺ノ木付近

この付近は、麓付近と同じく、国分層群の蒲生層・単人層が基盤に分布しているが、五反田層の露頭はなく、それに代わって有名な吉田貝層の露頭が散在する。

吉田貝層は、西中、桑之丸、鶺ノ木において海拔高度約五〇メートルの丘陵に点在して分布する。西中では約一〇メートルの層厚があり、最下部約一メートルは、中レキ大の安山岩円レキなどからなる基底レキ岩がある。このレキ層から湧水があり、参勤交代途上の

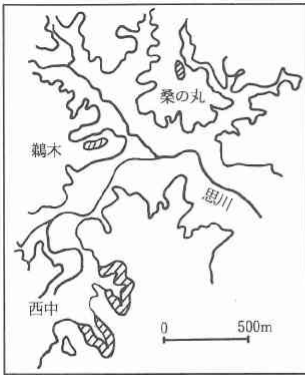


図3 吉田貝層の分布域



吉田小学校北側の露頭

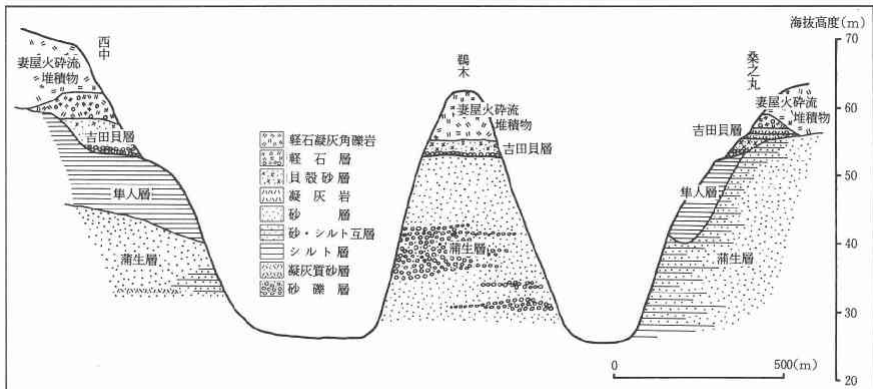
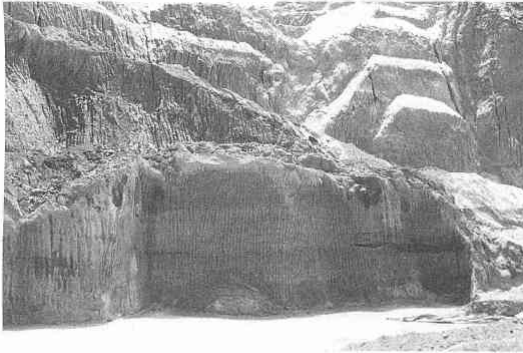


図4 吉田町桑之丸付近における地質断面図 (西井上、大塚 1980)



吉田貝層の露頭



吉田貝層の貝化石

殿様が飲用したことから殿様の水とよばれた。その上約七〜八層は、フジツボの遺骸が密集した、いわゆる「貝殻砂層」からなる。この上位は、黄色軽石層ならびに妻屋火砕流堆積物に覆われている。

吉田貝層から、矢部・細井（一九四一）に識別された貝化石は、二枚貝三九種、掘足類二種、腹足類七七種におよびその主なものは、ハンザワチヨウチン、キララガイ、ミツカドカタビラ、フクレユキノシノ、ザクロロガイ、

アカフジツボ、ヒヨクガイ、オトギクシノハ、クチベニデ、マルツノガイ、リュウグウボタル、ツキガイ、ヒメシヤジク、タマガイなどである。これらの貝類は、温暖な浅海に生息するものであることと、加久藤火砕流堆積物より下位の層群と考えられることから、関東の更新世中期の下末吉層に対比できる。したがって、リス〜ウルム間氷期の堆積物であると考えられる。（大塚・西井上一九八〇）

(三) 元峰、前峰から花尾山付近

本町北西部のこの一帯は、鮮新世の湖沼堆積物である永野層が基盤岩となっている。本層は薩摩町永野を模式地とする地層で、凝灰質の砂岩、シルト岩、火山砕屑岩をひんぱんに伴っていること、珪藻土を含むこと、植物化石を豊富に産出すること、などが特徴である。

永野層下部層は宇都谷で二〇〇メートルの層厚があり、凝灰質シルト岩からなる。溝口南部の凝灰質砂岩の中に著しく変質した Mud ball を含んでいる。珪藻化石の種類などからこの地層が堆積したのは汽水性の環境と考えられる。



火山岩からなる花尾山

また、吉田町西部の花尾山を中心に広く分布し、三重岳や飯山、女尻などでもわずかに分布する。本層は凝灰質砂岩、同シルト岩からなる湖沼堆積物でブナ、カシ、ケヤキなどの植物化石、ステファノデスカス、メロジラなどの淡水にすむ珪藻化石を産する。この地層が堆積していた当時は、吉田町一帯は大きな湖が点在し、火山活動が盛んに行われていたと思われる。

永野層上部層は、西佐多浦から元峰、前峰にかけて分布する。下部層と同じく、凝灰質砂岩、同シルト岩からなり、植物化石、珪藻化石を含む。堆積環境としては、珪藻の種類から湖が流れの緩やかな河川であったと思われる。

本町の北西部は永野層下部層を貫いて花尾山

雄岳、高峰など五〇〇〜三〇〇メートルの山岳を形成している。このうち、花尾山、前峰、飯山、三重岳は安山岩からなり、これらは花尾安山岩類と呼ばれている。

この岩石は濃灰色から青灰色を呈する角閃石含有両輝石安山岩である。

この付近には永野層の一部がスランプしており、また凝灰角レキ岩中にシルト岩が取り込まれていることから、永野層堆積時に貫入・噴出したものと思われる。

次に、高峰、元峰、雄岳、花尾山山頂付近、丸岡は流紋岩からなる。これらは花尾流紋岩類と呼ばれており、紫灰色から淡灰色の黒雲母斜長石流紋岩からなる。

二、中部地区

本名川の流域が吉田町の中部地区となる。本名川は、花尾山と三重岳を水源地とし、流域に分布するシラス台地を侵食しながら流れている。

(一) 本城付近

役場のある本城付近は本名川が形成した沖積平野と妻屋、入戸火碎流堆積物からなるシラス台地が発達している。女尻地区で本名川の流れが急勾配になりはじめる付近では、凝灰質の砂岩やシルト岩が観察できる。

これは永野層の一部である。本名川流域に発達する



本城付近の沖積平野とシラス台地

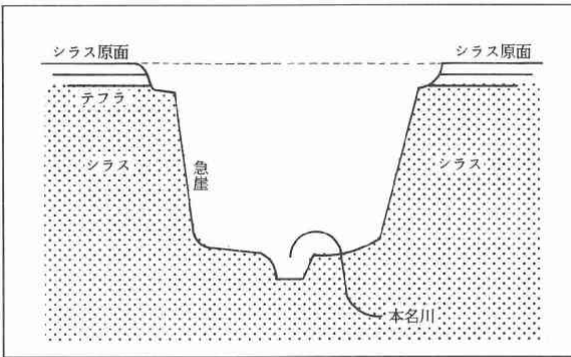


図5 シラス台地の断面



二本松の溶結凝灰岩

シラス台地は、本名地区から本城地区、東佐多浦地区方向に向かって、シラスの原面がゆるやかに低下している。

すなわち、本名の谷上付近のシラス原面の高さは約二五〇メートル、本城付近で二〇〇メートル、五反田付近で一五〇メートルと南から北に向かってさがっている。なお、南部の大原台地のシラス原面は約二三〇メートルである。

このように吉田町内でのシラス原面は、本名付近で高く、北に向かって低くなって行くと同時に、南東の大原台地の方向へもわずかに傾斜している。

(二) 二本松付近

内門から本名小学校へ行く道路を約一キロメートル程行った小橋を渡ると右手の竹林の上に溶結凝灰岩がある。これは加久藤火砕流堆積物が溶結凝灰岩となったものである。

(三) 宇都谷～都迫付近

道路沿いには順次層理の発達した地層が見られる。沖積平野が終わるあたりは国分層群の蒲生層、その上に軽



宇都谷～都迫の永野層

石の多い小田火砕流堆積物、さらに隼人層へと続く。

峠に近いところでは、国分層群より古い地層が出てくる。よく見ると緑色に変質した粘土質の角レキの入った地層やシルト岩からなる地層である。これは鮮新世の永野層の下部層である。本層は宇都谷南から都迫に至るこの道路沿いを模式地として分布している。

三、南部地区

南部地区は吉田町宮之浦地区にあたる。南には飯山、丸岡があり、東には五〇〇㍎を超える牟礼ヶ岡がそびえ

る。これらを水源とする流れは麓を侵食し、石下谷、倉谷、牟礼谷、関屋谷を形成した。ここを流れた水は一つに集まって精木川となり南流する。

宮之浦の西方には大原台地が広がる。

(一) 大原台地

大原の台地は海拔高度二・三〇㍎をもつシラス台地である。このシラス台地の表面には層厚約七㍎のテフラ（火山噴出物）がのっている。

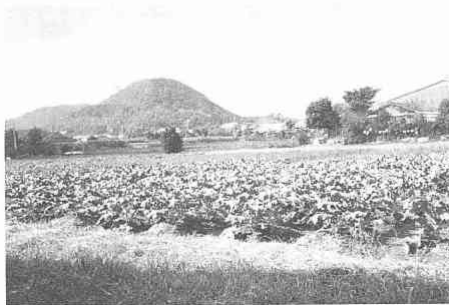


シラス台地を覆うテフラ

表土から一・五㍎のところには層厚約〇・七㍎のオレンジ色をしたテフラがある。これは今から一万一千年前桜島火山創生期のころの噴出物で（サツマ）とよばれるものである。下部に軽石が密集した部分があり、中ほどはさらさらした火山砂の部分があり、上部には粘土質の火山灰がある。高温のマグマが海水と反応



火山岩からなる牟礼ヶ岡



流紋岩の露頭がある丸岡

しておこるマグマ水蒸気爆発によって放出された一種の火砕流堆積物である。桜島に近い吉野台地では層厚がさらに厚くなっている。
黒っぽい表土のすぐ下には南の鬼界カルデラの噴出物（アカホヤ）と呼ばれる火山灰がある。今から六千三百年前の噴出物である。台地面は仁風学園付近から県総合教育センターの方へゆるやかに傾斜している。

(二) 牟礼ヶ岡、赤崩

牟礼ヶ岡、赤崩を中心にした五〇〇級級の山地は牟礼ヶ岡安山岩と呼ばれる火山岩からできている。この岩石

は板状節理がかなり顕著に発達し、新鮮な部分では、灰色黒色玻璃質であり、三〜四ミリの淡黄色もしくは白色を呈する透明な長石が見られる。角閃石含有両輝石安山岩である。

牟礼ヶ岡、赤崩の中腹にはそれぞれ緩斜面があり、ここには牟礼ヶ岡団地や県青少年研修センターがつくられている。さらにその下の二〇〇級ぐらいの台地面は入戸火砕流堆積物からなるシラス台地面である。

(三) 丸岡付近

吉田南中学校から中原を通って緑ヶ丘に抜ける道路がある。この道路沿いの丸岡付近に流紋岩の露頭がある。岩石は風化して褐色になっているが、新鮮な部分は紫灰色から青灰色を呈する黒雲母斜長石流紋岩で部分的に流理構造を示す。

(県総合教育センター 橋本将司)

参考文献

- 西井上剛資・大塚 裕之 (昭和五十五年) 鹿児島湾北部沿岸地域の第四系 鹿児島大学理学部紀要13号
- 大木 公彦・早坂 祥三 (昭和四十五年) 鹿児島市北部地域における第四系の層序 鹿児島大学理学部紀要3号
- 荒牧 重雄 (一九六九) 鹿児島県国分地域の地質と火砕流堆積物 地質雑誌七五号No.8

第二章 気候・風土・生物

第一節 気候・風土

一、吉田町の気候の特色

鹿児島県の気候の特徴は、「高温多湿」とよく言われている。本町の気候も過去の観測データをもとに、全国各地と比較すると、鹿児島県の特徴と同じく高温多湿であることが表1によってよくわかる。

吉田と鹿児島を比較した場合、夏日（最高気温が二五度C以上の日）はほとんど変わらないが、冬日（最低気温が0度C以下の日）は吉田のほうが二倍近くも多い事がわかる。この理由としては、海岸線からの距離による違い（鹿児島は臨海部、吉田は内陸部にある）と地形的な違い（鹿児島は広い平野、吉田は多くが盆地である）によるものである。この違いは標高の高い吉田の南部地域では、さらに大きくなっている。

第2表は、札幌・東京・鹿児島と吉田の平均気温を比較したものである。第1表では、吉田の平均気温が八・九・十月で特に高いこと。第2表では、吉田の夏は鹿児島市と同様に夏日が多く、冬の寒さは東京都と大差が無

第1表 吉田と全国各地との気候の比較

(1) 各地の平均気温 (°C)

月 地点	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年
札幌	-5.1	-4.4	0.6	6.1	11.8	15.7	20.2	21.7	16.9	10.4	3.7	-2.8	7.8
東京	4.1	4.8	7.9	13.5	18.0	21.3	25.2	26.7	23.0	16.9	11.7	6.6	15.0
吉田	4.8	8.5	9.8	14.8	19.1	22.3	23.6	28.4	25.6	24.1	13.5	9.0	17.8
鹿児島	6.7	7.8	11.0	15.6	19.4	22.7	26.9	27.3	24.7	19.1	14.2	8.9	17.0

(2) 年間平均寒暖日数

日数	地名	札幌	東京	吉田	鹿児島
最高気温が25°C以上の日		50日	108日	142日	145日
最低気温が0°C以下の日		145日	43日	41日	25日

(3) 年間平均雨量 (mm)

札幌	東京	吉田	鹿児島
1,141	1,503	2,256	2,433

いこと。第3表では、年間平均雨量が鹿児島市と同様に多い事を示している。

第2表 吉田と県内各地の月別平均気温（℃）

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	平均
大 口	4.4	5.7	9.0	14.2	18.6	22.1	26.2	26.3	26.1	17.3	12.1	6.5	15.1
吉 田	4.8	8.5	9.8	14.8	19.1	22.3	23.6	28.4	25.6	24.1	13.5	9.0	17.8
鹿児島	6.7	7.8	11.0	15.6	19.4	22.7	26.9	27.3	24.7	19.1	14.2	8.9	17.0
名 瀬	14.2	14.5	16.5	19.6	22.4	25.3	28.1	27.8	26.6	23.0	19.8	16.2	21.2

まず、県北の大口と比較してみよう。1月から6月、7月から9月ごろまではほぼ同じ値を示している。秋の10月から12月にかけては吉田の方が暖かい。年平均でも約8℃吉田が上回っている。

吉田の資料は、昭和50年4月～52年2月まで吉田北中学校で観測したものの中、51年度分、他のものは、昭和52年理科年表と同年の鹿児島県気象潮汐表による。

第3表 年間寒暖日数の比較

各地の年間寒暖日数

地 名	真夏日	夏 日	冬 日	真冬日
札 幌	9	50	145	51
東 京	47	108	43	0
吉 田	50	134	39	—
鹿児島	69	145	25	—
名 瀬	92	179	—	—

真夏日：最高気温が30℃以上の日
 夏 日：最高気温が25℃以上の日
 冬 日：最低気温が0℃未満の日
 真冬日：最高気温が0℃未満の日

北に行くにつれて真夏日、夏日が減り、反対に冬日、真冬日が増えていくのがよくわかる。吉田は鹿児島と似ているが冬日が特に多い。名瀬は、寒さ知らずの土地らしく冬日、真冬日など全くない。

第4表 吉田町の雨量・降水量別日数

(1) 吉田の年度別月平均雨量 (mm)

年度\月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	総雨量
昭50	—	—	—	394	122	519	159	104	220	230	89	116	—
51	74	98	41	150	302	369	415	95	325	155	29	110	2,256
52	38	140	260	389	311	754	165	238	189	173	86	82	2,824
平均	56	119	150	311	245	547	226	145	244	187	68	102	2,400

(2) 日降水量 1mm 以上の日数

年度\月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年
昭50	—	—	—	14	10	14	10	8	6	13	3	5	—
51	8	7	6	19	19	7	6	5	5	5	7	9	93
52	5	7	14	12	13	19	9	9	12	2	9	7	118

(3) 日降水量 10mm 以上の日数

年度\月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年
昭50	—	—	—	12	6	13	7	3	4	7	3	4	—
51	5	5	2	8	18	8	5	2	5	4	1	4	67
52	1	6	7	9	9	15	2	5	8	0	2	3	67

(4) 日降水量 30mm 以上の日数

年度\月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年
昭50	—	—	—	5	1	10	2	2	1	1	1	2	—
51	0	2	0	0	0	6	4	0	4	3	0	1	20
52	0	1	2	5	5	6	2	3	1	1	1	0	27

日降水量 1mm 以上の日というのは何らかの形で雨が降った日である。4月、5月～6月にかけての梅雨期には1ヶ月の1/3から2/3の日は雨が降っている。

日降水量 10mm から 30mm になると本格的な雨になる。10mm 以上は年間を通じて多いが 30mm 以上になるとやはり梅雨期の6月ごろに多くなる。

(5) 日降水量 50mm 以上の日数

年度\月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年
昭50	—	—	—	1	0	3	0	0	0	1	0	1	—
51	0	1	0	0	0	1	4	0	3	2	0	0	11
52	0	0	2	2	1	4	1	3	0	0	0	0	13

(6) 日降水量 100mm 以上の日数

年度\月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年
昭50	—	—	—	0	0	0	0	0	0	1	0	0	—
51	0	0	0	0	0	1	3	0	1	0	0	0	5
52	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	2

日降水量が 50mm, 100mm になると大雨から集中豪雨になる。それでも、100mm をこえる雨は1年間に数回である。

二、降霜、降雪と農作物

気温や雨量・湿度などは、人間の生活、特に農業生産にとって大きな影響を受ける条件の一つである。初霜・晩霜によって或る種の作物が一朝にして収穫皆無というような被害を受けることも珍しくない。

本町北地区の初霜・晩霜、初〜晩霜間日数について過去の記録があるので、作つけ計画や収穫予想の参考になれば幸いである。

南地区においては標高が高いので、北地区に比し降霜日数がやや多いのではなからうか。

昭和二年 初霜 昭和元年十月二十日

晩霜 同 二年三月二十二日

昭和三年

初霜 昭和二年十一月二十三日

晩霜 同 三年三月二十三日

昭和四年

初霜 昭和三年十一月一日

晩霜 同 四年三月二十二日

次の表は、近年、北地区、本名地区などについて、降霜の状況と降雪（積雪の状況）を調査したものである。

平成元年度の初〜晩霜間日数は特に少ないようである。

吉田町における初霜・晩霜

	昭和4年度	昭和63年度	平成元年度
初霜	3.11.1	63.10.28	平成1.11.20
晩霜	4.3.22	平成1.3.22	" 2.3.19
初晩霜間日数	143日	145日	119日

降雪（積雪）の日数

降雪日		1月27日 3月7日	1月23日 24日 25日
日数	—	2日	3日(1日)

雪の深さは、北地区に比し、南地区の方がやや深いようである。

霜害予防を考えた作つけ計画が大切である。

南地区においても、牟礼ヶ岡地区を除いては初霜・晩霜ともほとんど変わりは無いようであるが、霜の強さは南地区の方がやや強いようである。牟礼ヶ岡地区は標高が高いことから初霜・晩霜日数が少し多くなるようである。

降雪日数は町内一円差はないが積

第二節 生物

吉田町は、本県のほぼ中央部に位置し、気候も県内他の地域と同じく、高温多湿なので、動・植物の分布も県内他の地域とほとんど変わりはないようである。

集落周辺にモウソウ竹の群落が多く見られ、山の斜面を利用して杉や檜などの針葉樹が計画的に植栽され、山の尾根近くに樟や椎・樫などの雑木林（広葉樹林）が多い。終戦後異常発生した松食虫の被害によって、松の木は枯死し、町内の山に松の木はほとんど見当たらない。

動物の分布についても、県内他の地域との差異は無いようであるが、最近の強力な農薬使用のせいかな戦前は河川にたくさん住んでいた「エビ」や「シジミ」「ドジョウ」などをほとんど見かけなくなった。また、数少なくなったものには「メダカ」「タニシ」「ホタル」などがある。一方で、最近になって繁殖したのではないかと考えられるものに、猪や「ナメクジ」・「カタツムリ」類などがある。以前はあまり聞かなかった猪の被害を、最近是集落周辺の畑でも多く耳にするようになった。

昔から日本人は、季節感に敏感で、四季折々の花鳥風月、海幸山幸を愛でながら生活を楽しんで来たが、季節に関係の深い生物を取り上げると次のようである。

一、春（三・四・五月）の生物

おもな植物

ナの花・タンポポ・レンゲ・スミレ・ヤマザクラ・ヒガンザクラ・ソメイヨシノ・ヤエザクラ・モモ・ツツジ・サツキ・フジ・レンギョウ・ハナズオウ・ハリエンジュ（開花）・ウメ（結実）・ムギ（出穂）・イネ（種まき）

おもな動物

ガン（北帰行）・ウグイス・ヒバリ（初音）・トカゲ類・ヘビ類・カエル類（出現）・ツバメ（渡来）・モンシロチョウ・キアゲハ・ミツバチ（出現）

二、夏（六・七・八月）の生物

おもな植物

シヨウブ・カキツバタ・アジサイ・クチナシ・ドクダミ・タチアオイ（開花）・ビワ・モモ（成熟）・アサガオ・ヒルガオ・カンナ・ダリア・キョウチクトウ・フヨウ・ツキミソウ・オオマツヨイグサ・ヒマワリ・ヒヤクニチソウ・オシロイバナ・サルスベリ（開花）

おもな動物

ホトトギス・フクロウ・ゴイサギ・シラサギ類・ホタル類（出現）・アユ（解禁）・アブラゼミ・ヒグラシ・ミンミンゼミ・クマゼミ・コオロギ類・スズムシ・マツム

シ・キリギリス(初声)・ウスバキトンボ・アキアカネ
(赤トンボ) (出現)

三、秋(九・十・十一月)の生物

おもな植物

コスモス・キク・ケイトウ・ハゲイトウ・ヒガンバナ・
クズ・ハギ・モクセイ(開花)・イネ(結実)・ススキ
(出穂)・カエデ(紅葉・落葉)・イチヨウ(黄葉・落葉)・
クリ・シイ(結実)・アケビ・カキ(成熟)・サクラ・モ
クレン・ヤナギ(落葉)

おもな動物

ツバメ(南帰行)・カモ類・ツグミ(渡来)・セキレイ
類・モズ(出現)・シラサギ類(帰行)・イノシシ(出現)

四、冬(十二・一・二月)の生物

おもな植物

スイセン・ツバキ・サザンカ・ウメ(開花)

おもな動物

ヒヨドリ(渡来)・ウグイス・メジロ(出現)・ヘビ類・
トカゲ類・カエル類・イシガメ(冬眠)
吉田町に生えている植物や日常町民の生活にかかわり
の深い動物について、おもなものをとりあげたが、町内

に分布する動物・植物には、まだまだ多くの種類がある
ので、その他のものについては巻末の資料編に収録する
ことにした。

第四章 人口と世帯数

第一節 本町の人口

一、人口と世帯数の推移

昭和六十年年度の国勢調査による本町の人口は、八、三
七七人、内男子四、〇六一人、女子四、三一六人で、世
帯数二、六〇三戸、人口密度は一平方キ^ロメ^{ートル}当たり一五四・
二四人で、一世帯構成人員は三・二人と全国平均に近い
数値を示している。

戦前に比べて、戦後昭和二十三年(一九四八)の人口
は九、六四〇人と急激に増加しているが、これは、旧軍
人の復員や海外からの引き揚げ者などの帰村によるもの
である。また、人口が昭和二十五年(一九五〇)の九、
九三二人をピークに、年々減少に転じているのは、世の
中が安定したことによる都市部への人口の流出や家族計
画によるものと考えられ、昭和四十年代の後半には七千

人口と世帯の推移

内訳 年次	世帯数	人口			人口密度 (人/㎡)	一戸当り (人)
		男	女	計		
大正 9	1,547	3,410	3,624	7,034	130	4.5
1 4	1,598	3,587	3,635	7,222	133	4.5
昭和 5	1,630	3,751	3,877	7,628	140	4.7
1 0	1,659	3,766	3,809	7,575	139	4.6
1 5	不詳	3,643	3,706	7,349	135	—
2 2	2,038	4,664	4,976	9,640	178	4.7
2 5	2,090	4,835	5,097	9,932	183	4.8
3 0	2,058	4,651	4,925	9,576	176	4.7
3 5	2,053	4,174	4,525	8,699	160	4.2
4 0	1,940	3,573	3,996	7,569	139	3.9
4 5	1,943	3,225	3,641	6,866	126	3.5
5 0	2,050	3,309	3,617	6,926	128	3.4
5 5	2,289	3,579	3,839	7,418	137	3.2
6 0	2,602	4,061	4,316	8,377	154	3.2
6 1	2,752	4,215	4,438	8,653	159	3.1
6 2	2,863	4,376	4,603	8,979	165	3.1
6 3	2,919	4,434	4,681	9,115	166	3.1
平成 2	3,245	4,845	5,177	10,022	183	3.1

人の大台を割るにいたった。その後、再び緩やかな上昇に転じ、昭和六十三年には九千人台を超えるに至ったが、この人口増は、本町が五十万都市鹿児島島の近郊に位置するという立地条件に基づく社会動態によるもの大きい。

緑ゆたかな田園の町吉田、教育の町吉田、出で湯の里吉田、更に、牟礼ヶ岡団地（三井ニュータウン）に代表される大規模団地の造成をはじめ、数々の宅地造成による転入世帯数の増加によって、平成二年十二月二十七日一人に達し、十二月末現在一万二千二人となった。

二、人口の増加率

吉田町の人口の増加率は、次表に示すように、昭和五十年から五十五年までに七・一%、昭和五十五年から六十年までに一一・九%と、めざましい伸び率をみせて、人口増加市町村十傑のうち国分市に次いで第二位であった。

平成元年末鹿児島県企画部発表の「土地利用転換動向等調査」によると、昭和六十年から平成元年の四年間の伸び率は次のようになっていて、これまで一位であった国分市を抜いて、県内のトップにおどりだした。

吉田町	一三・六%
国分市	一〇・〇%
伊集院町	五・七%
始良町	四・六%

人口総数においても、一万人の大台を超え急増しつつある。

特に町内で転入者の多い地区は南部に属する宮之浦地区と本名地区で、北部地区は旧態依然として動きが鈍い。

県内人口増加市町村10傑

順位	昭和45～昭和50		昭和50～昭和55		昭和55～昭和60	
	市町村名	増加率	市町村名	増加率	市町村名	増加率
1	鹿児島市	13.3%	始良町	21.8%	国分市	15.5%
2	始良町	11.6	松元町	19.5	吉田町	12.9
3	加治木町	10.1	国分市	11.9	伊集院町	10.7
4	溝辺町	7.6	鹿児島市	10.6	松元町	10.2
5	国分市	6.5	加治木町	9.3	始良町	10.0
6	隼人町	5.8	隼人町	8.9	川内市	8.8
7	名瀬市	4.1	鹿屋市	7.8	隼人町	8.1
8	指宿市	2.8	吉田町	7.1	溝辺町	6.8
9	鹿屋市	1.4	伊集院町	6.3	樋脇町	5.6
10	伊集院町	1.4	川内市	6.2	鹿児島市	5.0

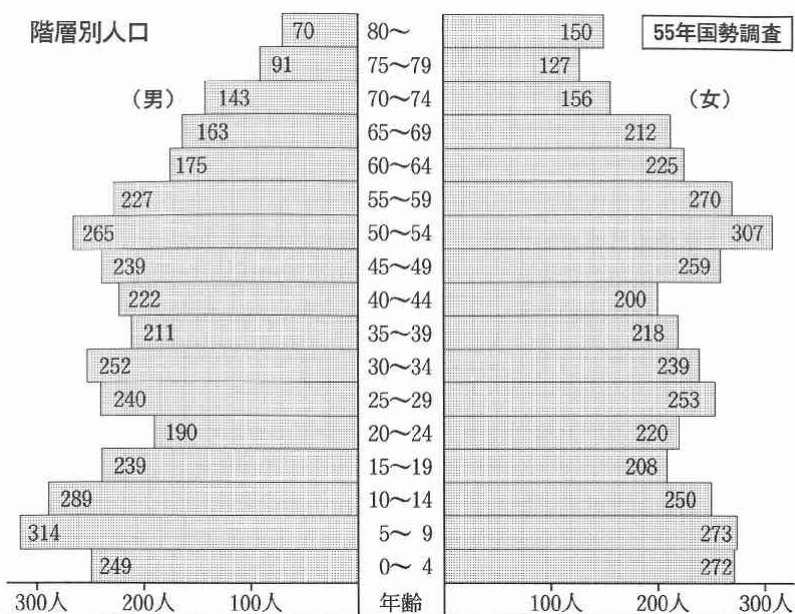
第二節 人口・世帯数の構成

一、年齢別・男女別人口（階層別人口）

昭和五十五年国勢調査の階層別人口のグラフに示されたように本町の人口構成は、男子より女子が多く、男女とも四十代から二十代までやや落ち込みがみられ、五十代から六十代までふくらみをみせて、ひょうたん型に近い型をなしている。五十代から六十代までは、男子八三〇人、女子一、〇〇四人、合計一、八三四人で全体の約二五％にあたり、働き盛りの中年層（二十五歳から四十九歳）は男子一、一六四人・女子一、一六九人で約三一％を占めている。老年層の六十五歳以上が約一五％であり、男子四六七人、女子六四五人で女子の方が一七八人も多くなっている。

二、地区別人口・世帯数

町内の各地区別に人口・世帯数の動きをみると図表に示されたとおりである。本名地区では昭和六十年度の世帯数は一、〇二戸で、平成二年三月末までに六七戸伸び、宮之浦地区では同じ期間に六四七戸から団地を合わせて一、〇二二戸へと三七五戸のめざましい増加をみせ、鹿児島市のベッドタウンとして発展途上にあることがうかがわれる。



人口の動態

資料：住民基本台帳

年次	自然動態			社会動態			人口増減
	出生	死亡	増減	転入	転出	増減	
昭和45	76	66	10	376	565	△ 189	△ 179
50	69	86	△ 17	495	496	△ 1	△ 18
55	79	91	△ 12	631	441	190	178
56	83	87	△ 4	662	465	197	193
57	93	78	15	612	446	166	181
58	87	81	6	671	448	223	229
59	70	79	△ 9	651	461	190	181
60	83	87	△ 4	668	449	219	215
61	84	65	19	681	525	156	176

集落別人口と世帯数の移りかわり

年次	項目	集落名	東佐多	西佐多	本城	本名	宮之浦	牟礼ヶ岡	合計
明治一七年	世帯数		162	173	80	329	177	—	921
	人口	男	350	357	185	732	423	—	2,047
		女	374	351	170	682	447	—	2,023
		合計	724	708	355	1,414	870	—	4,070
大正一四年	世帯数		345	366	159	527	300	—	1,597
	人口	男	559	775	351	1,178	717	—	3,580
		女	558	764	357	1,232	724	—	3,630
		合計	1,117	1,539	708	2,410	1,441	—	7,210
昭和六年	世帯数		552	371	164	522	305	—	1,715
	人口	男	603	795	390	1,218	730	—	3,736
		女	608	750	387	1,332	764	—	3,871
		合計	1,211	1,575	777	2,550	1,494	—	7,607
昭和五五年	世帯数		303	473	184	842	554	—	3,356
	人口	男	454	706	274	1,386	870	—	3,690
		女	520	770	321	1,381	882	—	3,874
		合計	974	1,476	595	2,767	1,752	—	7,564
昭和六〇年	世帯数		515	319	191	1,012	647	—	2,684
	人口	男	725	478	286	1,580	1,069	—	4,138
		女	833	507	320	1,604	1,091	—	4,355
		合計	1,558	985	606	3,184	2,160	—	8,493
平成二年	世帯数		320	502	221	1,092	485	609	3,229
	人口	男	437	659	300	1,631	765	1,035	4,827
		女	502	756	329	1,715	806	1,046	5,154
		合計	939	1,415	624	3,346	1,571	2,081	9,981

※ 平成2年度は10月末現在である。

第五章 自然の利用

第一節 土地の利用

土地は、現在および将来においても限られた資源であり、生活や生産のための基盤でもあるので、適正かつ合理的な土地利用を図ることは、地域開発や環境保全などのため極めて重要なことである。

そこで本町の自然的、社会的、経済的条件を配慮しながら合理的・計画的な土地利用を図り、「緑と自然の中に豊かさ」と住みよさのある田園の町づくり」を基本目標にして、健全で快適な町づくりを進めている。

そのため自然環境・生活環境の保全・確保、生産基盤等の整備改善、調和のとれた人間居住の総合的形成を図り長期的かつ広域的視野のもとに、土地有効利用の合理化を推進しなければならない。

特に転換期にある農業の活路を見いだすため、水田の基盤整備や、本町に多い山林の有効利用と健全な森林資源の確保を図るとともに、農道・林道の整備や、治山施設の整備、保安林の保護対策などを推進し、みどりの保全と自然保護に努める必要がある。

第二節 水の利用

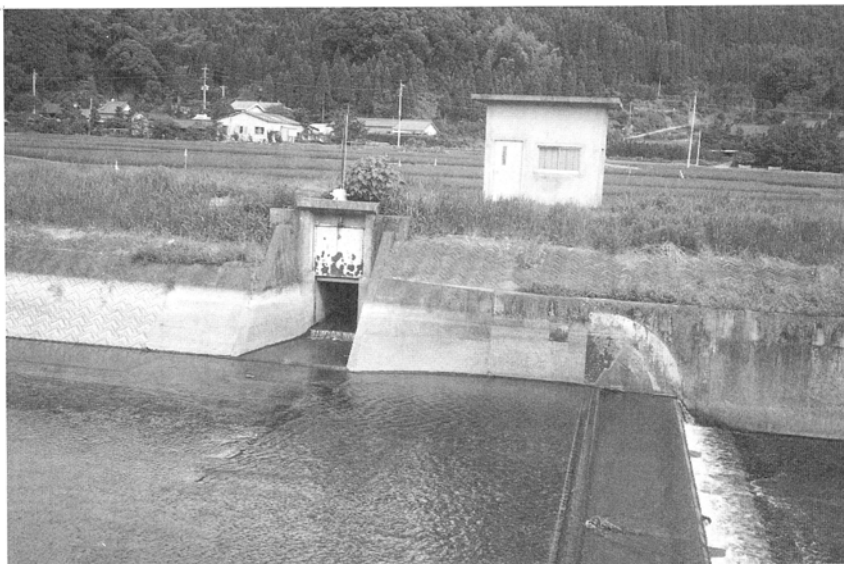
水は生活を営む上に欠くことができないもので、近年における生活水準の向上、或いは人口増が予想される本町では水の需要が増大するので、水資源の確保と安定供給が今後の重要な課題である。

一、生活用水

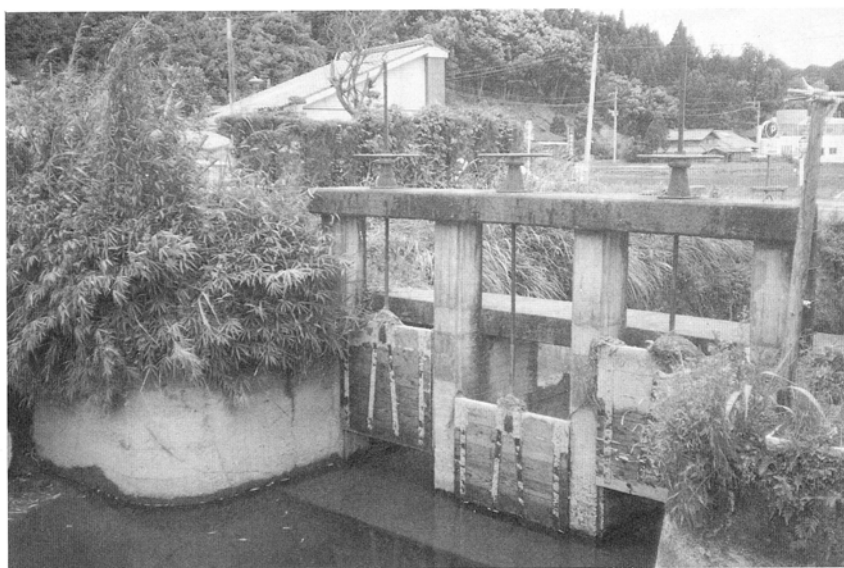
生活用水については、そのほとんどを地下水に頼っている現状であるが、今後生活用水は、地下水の利用と河川表流水、湧水の有効利用を図りながら、簡易水道の整備拡充を推進しなければならない。

本町の簡易水道は、町営簡易水道が五地区で、創設当時は、北部地区の河川表流水を除き、すべて湧水を水源としていた。しかし、住民の生活様式の変化と生活水準の向上に伴い、使用水量が著しく増加するとともに湧水量の減少により、現在では、使用水量の大半を地下水に依存している。

また、町営簡易水道施設のほかに牟礼ヶ岡簡易水道があり、規模も大きく、水源は地下水で三方所の深井戸から取水し、牟礼ヶ岡団地および周辺の集落にも給水している。



小野田井堰（取水口）



小野田用水水門

二、農業用水

農業用水には、主に河川表流水が使われ、山間の水田等では湧水に頼っている場所もある。本町は地形的に起伏が激しく、また、大型河川もないので、流量も乏しく、生活用水取水との関連もあるので、水資源の確保については十分考慮しなければならない問題である。

農業用水の利用については、東・西佐多浦の小野田用水のように、井堰・水門等の設備が完備した所もあるが、大半が素掘りの土水路であり漏水が多く、利用効率の悪い所が多い。

農業用水については増大する水の需要、並びに干ばつ等への対応策として、川床・井堰・用水路等の整備を図り、効率的利用に努めるとともに、地下水利用や溜め池等の設置も積極的に推進する必要がある。

畑地については、灌漑用水施設がないため、自然現象に左右されやすく、施設園芸には一部地下水が利用されている。

三、工業用水

町内には多量に水を利用するような大規模の工場は無いが、農業用水および生活用水等との調整を図りながら、限りある水資源の有効利用に努めなければならない。

四、水の利用についての今後の課題

県都鹿兒島市に隣接する本町では、市のベッドタウンとして最近人口増加も目立つようになり、生活様式の近代化や多様化による生活用水需要が更に高まるものと考えられる。これらの需要に対処するため、総合的な水資源の開発を進め、人口集中地区を中心として、上水道事業の施策を推進する必要がある。なお、本町の既設の水道のうち、宮之浦地区を除き、各地区とも事業創設時に埋設したままの施設で老朽化が進んでいるので、年次的に給水管敷替えを計画し実施中である。

下水道については、まだ十分整備されていないため、家庭や工場から排出される生活污水や雑排水は、自然流下にもかかわらずの大部分である。都市化の傾向や住宅団地の建設などに伴って生活污水は年々増加の傾向にあり、そのために河川の水質汚濁や衛生環境の悪化がだんだん進行しつつある。従って、下水道の整備は、快適で衛生的な居住環境を保全するためにも、今後の大きな課題である。

以上で主な自然の利用について述べてきたが、本町の緑豊かな自然は生産に役立てるだけでなく、森林浴や遊歩道などに利用し、美しい景観と空気は、町民の精神的な安らぎと健康増進に役立てなければならない。